

---

# 異世界召喚（二週目）・ハードモード（仮）

It.

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界召喚（一週目）・ハードモード（仮）

### 【著者名】

It.

### 【あらすじ】

勇者として異世界に召喚されたユキトは、魔王倒した。目的を達成したので地球に帰るはずが、飛んだ場所は同じ世界。それも時間を使っている？ あいつがいるし、みんなユキトを知らない。それになんだかみんな強い！ 雑魚と言っていた相手にも苦戦する。だけどやつぱり魔王は生きていて、倒して下さって？ これって……ロープレとかにある一週目、か？

## 第一話『別れの言葉。』

異世界召喚なんてはた迷惑な概念がある。

平和な日常を、それにどんな感想を持つているのかは置いておくにしても、事情なんて無視をして無理やり自分たちの都合のいいようにある人物を自分たちの世界に呼び込む。

大抵の場合として、元の世界には帰れません。もしくは魔王とか世界の敵を倒してくれれば、なんて勝手なオプション付きだ。自分たちのことしか考えていない。

召喚されてしまった人物は右も左も解らない世界で、頼れる相手がいるわけでもなく（たまに友人と一緒に、というのはあるが）非常で非情な世界に放りだされるのだ。召喚された場所、時、場合によつてはすぐに命の危機に瀕することだって少なくない。

なかにはなんらかの能力や、生き抜くための武器を得て活躍する話なんてものはあるが、現実的に考えて不可能に近いだろう。その世界の常識によって違うが、仮に武器を持つて戦うことが普通の世界としてみよう。

武器は刃物。一般的に西洋剣と言われているものでいい。

さて、それをただの一般人が持とどうとすればどうなるだろう。

答えは簡単だ。

そもそも持ち上がらない。

例え持ち上げようとも、重さに耐え切れずに振ることなんて出来やしない。重さに耐え、振ることができたとしても、振り方を知らなければ、何もまともに切ることなんて出来ない。

それだけじゃない。武器を扱うための経験や知識。どこで使つべきかを取捨選択する思考。武器を振るう、つまり殺すということを受け入れる感情制御。

どれもが殺戮が日常的な非日常世界では必要なものだが、平和な日常で過ごしたただの人では手に入ることなんて出来ない。

こんなふうに、剣一つにとつても問題視することがある。

他にも、生活基準、対人関係などなど不安なことなんていいくらでも出で来る。

つらつらと述べてみたが、結局何が言いたいかといふと、異世界召喚なんてお断り。迷惑でしかないうことだ。

もつとも、こうして批判しているのも、それを自分自身が味わつたからこそ、なのだけれども。

喚ばれた【勇者】はただの【学生】だった。  
もういつの日だつたか、学校に忘れ物をして暗い校舎を歩いていた時、教室から不思議な暗い明かりが見えてた。自分の教室だつたし、何なのが気になつたのもあつて入つてみれば 気付けば見知らぬ森の中だつた。

そこからは森でいきなり熊つぼいなにかに襲われかけ、それを通りかかりの人物に助けて貰い、村に連れてかれた。まだ状況整理が出来ておらず、ありのままに喋つてみれば、勇者ではないのかと言われ王都へ連行された。

王都に着けば、まずは城に通され、異世界召喚をしたこと、勇者として魔王を討つてほしいこと、帰る方法は魔王を倒せばあるいは、なんてことをなんちやらかんちやら説明され、多少多めの路銀だけ持たされ、旅の仲間として【召喚の巫女】が付いてくるだけでさようなら。

展開に付いていげずに途方に暮れつつも、良い仲間にであつたことで少しづつ進み出していく。

そして、指の数では到底足りない死地の数々をくぐり抜け、つい先日、ようやく魔王を討つことが叶つた。満身創痍での勝利ではあつたが、その日の夜、大陸を越え、長く濃密な体験を共にした仲間たちとささやかに上げた祝勝会を忘れるはないだろう。

そして、自らの世界に帰るため、皆に別れを告げたあの日も。惜

しむ気持ちまあつたが、元は地球の住民のため、いつまでも居続けるのは、あまり良いことではない。

密かながら、互いに思いを募らせていた相手、【召喚の巫女】のアリストイとは、別れの間際に向こうは常に身につけていたネックレスを、こちらは旅の間も持ち続けた、自分が地球にいた証でもある制服のボタンを交換した。その一つを魔力糸で結ぶことで、世界が違えども互いを感じることは出来る。

別れの儀式の時、仲間たちが田畠くも首にかかつたアクセサリーが変わっているのを見付けられ、からかわれたのも恥ずかしながらも微笑ましく、別れの近さに淋しくなった。

そして、別れの時。

送還魔法陣の中心の真ん中にたち、友に旅をした仲間たちを見る。気付けば、勝手に口が動き、ひとりひとりと思い出を確認しあい、感謝の言葉を述べた。それだけでもう視界は滲んでいたが、田の前に列を作る仲間の中にいるはずのない『彼』が見え、ずっと言えずにいた感謝の言葉を送った。『彼』が微笑んだ氣がするのは、きっと氣のせいじゃないだろう。

静かに泣く【勇者】に声をかけたのは、【召喚の巫女】だった。

【勇者】は最後に、想い人である彼女へ語りかけた。  
弱くてごめん、と【勇者】は言つた。

【召喚の巫女】はそれもあなたの優しさの一部だ、と言つた。最初は嫌つていた私を、いまは受け入れてくれていてることも、とも。成熟しきれない精神は弱く、されどそれが優しき証でもある【勇者】は、彼女の言葉に『ありがとう。俺は、お前をこの世界で一番好きだ』と、何よりも強い想いを伝えた。

それを最後に、魔法陣に魔力を流す。勇者の送還魔法では、召喚魔法と違つて勇者自信の魔力を流すことで完成する。

じゃあな、仲間たちにそう告げ、彼らの思い思いの返事を耳に聞き入れた瞬間、視界に目一杯の光が入り、意識が暗転した。

さて。冒頭で異世界召喚を批判していたが、その異世界で過ぐすことへの抵抗は、日々を追ついでに少なくなつていったことは分かつて貰えただろう。

だが、さすがに一度も同じ経験をするのは「めんだ」と、元【学生】、元【勇者】、現在は【??】のコキト・オームラは思わずにはいられない。

意識が目覚め、まず状況を確認してみれば  
見覚えのない  
森の中にいた。

地球じゃないと分かつた理由は、いつぞやの時とは違い、辺りにある植物や樹木の観察したためである。地球にはないであろう植物、そして虫がいた。

決定打には欠けたが、むやみに動かない理由にはなり、川を見つけ出して一夜を過ごそうと夜を迎えた。夜になつて見上げた夜空には、光を反射させた星が一つ昇っていた。

見たことのあるその夜空に、コキトはびっくりようもなく不安に駆られるのだった。

## 第一話『森の中で再びお前と』

不安を胸に抱えながらも一夜を過ごした。待っていたのは、変わらない風景だけであつたが。

固まつてしまつた体をほぐすようにストレッチをする。適度に温まつたところで、構えを作り、ステップ、軽くパンチと蹴りの確認をし そこで気付く。

「……癖つて抜けないもんだな」

旅をしていた頃の習慣だつた。毎朝誰よりも早く起き、見張りがてらに自主トレーニングをしていたのを思い出す。いまも特に意識をせず、自然とやつていた。少し寝ぼけながら、というはあるが。

状況が変わつても、変わることはあるとこことを実感する。「でも、野外で一人で夜を過ごしたのは初めてか」ユキトが憂いたのは、故郷にある愛用のベッドではなく、背中を預けられる仲間たちだつた。

旅に出た時から【召喚の巫女】のアリステイ、そしてあの世界で初めて会い、一番世話になつた『彼』と一緒にだつた。

ネックレスにぶら下がつて、小さな綺麗な石に触れる。アリステイが一番大切にしていて、彼女の魔力をが篠められたものだ。いまは魔力を感じられいが、彼女の想いはいまでも感じることが出来る。

そして、村人であり、ユキトが恩人、親友ともいえる『彼』のことを思う。

ありがとう、と呟き、ユキトはしばらく目をつむつた。黙祷。これもまた、毎朝していることだ。

記憶に思いを馳せながら、また身体を動かす。

そうすることで、少し余裕が出来た。  
この先、どうするかについて考えを巡らせる。

(どんな世界であるのかを知るのが第一だ。……月が一つのこと  
は、可能性がないわけじゃないよな)

僅かながら希望を胸に燈す。ずっと見続けた夜空にも月は一つあ  
つたのだ。また同じ世界、といつ可能性だつてあるはずなのだ。

そうすれば、また彼らに会つことが出来る。恐らく一生の別れを  
告げたというのにまた会つというのは、少なからず恥ずかしいも  
のはあるが、それもまた人生とでも言えるのではないか。少し頬が  
緩む。

だけど、理由がわからない。たしかに魔王は倒した。各国の抗争  
も落ち着いた。『勇者祭』とかいうので起きたインフラもも收まり  
つつあつたし、<sup>ユキト</sup>急激な経済的な落<sup>ト</sup>下もそこまで心配ない。なにより  
そんなことに勇者は必要ない。

勇者であるユキトに求められたのは、魔物からの迫害を畏れる人  
民の希望だつた。ユキトの物語の舞台は、小説にあるような人語を  
理解する魔族はおらず、本能のままの魔物ばかり。彼らを操るのが  
魔王で、人間とは異なる価値観をもつた正真正銘の化け物だつた。  
異種族はいたが、人間との関係は良好であり、問題は起きなかつた。  
だから、魔物を統べる王だけを討てばよかつたのだ。もつとも、  
最後まで謎が解けないままに舞台を降りていった、魔将を名乗り人  
語を扱うイレギュラーはいたが、倒した以上はさほど問題視しなく  
てもいいだろう。

となると、やはり同じ世界だとしたら、また迷い混んでいるこの  
状況が不思議でしかないのだ。魔法の事故、とも考えたが、アリス  
ティが失敗したところなどよほどのことがないかぎりありえないし、  
なによりあの部屋は彼女が万全であるために作られた部屋なのだ  
から、事故の線は薄い。

「考えたところで、答なんて出るはずもない、か」

ユキトは魔法について学を持ち合わせていない。魔力を感じるこ  
とは出来るが、魔法というに概念には馴染めなかつたのだ。下手に  
地球で科学を習つてしまつたのからかもしれない。何もないところ

から、なにも使わずに火を起こすのは理解しがたかった。

その代わりとでも言おうか、『氣』というものに関しての順応性はあった。

自らを高める鬪氣が、スポーツで氣合を入れる時の感覚に少なからず似ていたからだ。それもあって、ユキトは拳による戦闘を好み。他にも理由はあるが、自分に合っているからというのが一番大きい。

身体に巡らせていた『氣』を解き、呼吸を整えていく。落ち着いたところで、汗を流すために川に入ることにした。

着ているもの 着ていたのは、身体の動きを阻害しない麻布のズボンと綿の上着だった。を脱ぎ、下着だけの姿になつてまずはそれを洗つて日当たりのいい岩に干す。乾くのに時間がかかりうるので、適度に川の探索をすることにした。

水は綺麗で、生き生きとした海藻が踊り、見たことのない形状や色をした魚が泳いでいる。

「綺麗だな……」

なにをする宛もないというのに……いや、宛もないからこそ、純粹な感想が口からこぼれ出ていた。よほど澄んだ川なのだろう。そして川だけじゃなく、周りにある静寂な森。そこからは風の吹き抜ける音や、鳥の<sup>さえず</sup>囀り、動物がいる微かな気配が伝わってくる。そんなことを感じながら穏やかな時を過ごしつつ、日が良い感じに昇ってきたころだつた。

そう遠くない川添いの辺りから、不意に物音がした。

自然の音ではない。明らかになにかが地面を踏んだ音だ。そこまで瞬時に考えを巡らせ、油断しきつっていたことに叱咤しつつも振り返りながら臨戦体勢をとる。

振り返ったその先にいたものは いや、人物はユキトに驚愕を与えるには充分すぎる人物だった

「…………なんで……なんで、お前、が？」

思つようにも声が出ず、掠れた音が耳をうつ。いつの間にかユキト

は田の前の人を観察していた。そうあることで、違つてこつゝとを確かめたかつたのかもしれない。

青年だ。コキトよりやや年上くらいで、髪は赤みがかつた茶色。遠田でも分かるくらいい、陽気な雰囲気が出でこる。

田をひくのは、腰に剣をぶら下げて、膨らんだ革袋を担いでいた。腰にあるその剣も、そしてその顔も見たことがある。

いや、見たことがあるレベルの顔じゃない。

コキトが絶対に忘れないと誓い、そして忘れることも出来ないだろう相手。

その彼は、担いだ革袋を地面に降ろすと、コキトに一言

「久しぶりに来てみりや、珍しいこともあるじやねえか。

よう。 その野生児！

いい魚でもとれてるかー？」

間違いなく『彼』の声、そしてあの親しみ易い口調で問い合わせてきた。

記憶にあるその姿に思考が停止し、いつの間にかコキトは作っていた構えを解いていた。

まるで旧知の仲である友人へかけるような快活さに、コキトのことを分かっているのかと疑う。もし知ってるのなら、『彼』は世界の理と神様にすら逆らつたことになる。

「どうして、だよ……」

『彼』と会つたのは、もう、一年近く前。あのときも森の中だつた。キラーベアーに襲われたコキトを助けた青年。

「なんで、お前が生きているんだ……アラム……つー……」

掠れた声が宙を震わせたが、どうやら『彼』には聞こえなかつたらしい。

「ん？ なんだ、そんなに驚くこともないだろ。こへり邊鄙な森だからつて、誰とも会わないわけじやねえんだからよ」

少々的外れなことを言いながらも、コキトの姿を不思議に思つたのかゆつくりと近寄つてくる。その姿が近くなればなるほど、疑惑

は大きくなる。

近い川辺にまできて、彼の顔がしつかり見えた時、ユキトはもう疑うことを見めた。

「どうみても彼はアラム。」

かつてユキトと共に旅をし、そして彼を庇つて世界をたつた男。彼は水際にくると水面をみて、

「あつれ、魚がいねえな……」

ひとり落胆した。その呑気さに、毒氣を抜かれたような気分になる。もうただ驚いているのが馬鹿らしくなつた。脳天氣はアラムの代名詞のようなものだつたじゃないか。

それに。

ユキトはもう色々なことを経験している。地球という星の中にある、日本という土地で生きていたころから比べてみれば、有り得ないこと、それも空想上のものでしかなかつたものが現実となつてゐる。初めて遭つた時には困惑し、なにも出来なかつた。理不尽さに涙を流したこともあつたくらいだ。……これは誰にも言つたことはないが。

だが理不尽だといつて喚くだけではどうにもならず、微かな希望を胸に一つの世界を救つた。語り始めればキリがないそれを経て、ユキトは現実を認識して柔軟に受け入れるくらいのことは出来るようになつた。

「だつたらいまもそうすればいい。」

ここまで近くにきて、ユキトの顔を見てもアラムはなんの反応もしなかつた。ユキトのことを覚えていないのか、わざとなのか、それとも知らないのか。

もし知らないとして、これが夢じやないのなら、もしかしたら時間の移動でもしたのかしれない。そんな考へても、無理矢理自分を納得させるくらいには、ユキトは非日常に慣れてしまつていた。

というより、非日常が、いつのまにか日常にすげ替わつていたのだけれど。

心を落ち着かせたといひで、探るよつに声をかけた。

「あんた、誰だ？」

「俺か？」

答えはもう予想がついており、ほぼ間違いないのだけれど、それでも聞かずにはいられない。短く返事をして先を促す。

「俺はカタイロの村のアラム＝ジトニコフだ。よろしくなにこやかな笑顔と共に返ってきたのは、いつの日か聞いたことのある台詞だつた。

知つてゐる。

かつて訪ねた地。

普通は初めて会つた相手に言つ葉の『よろしく』を使つたこと。ここまでくれば間違いない。いまユキトがいる世界は、時間をさかのぼつた、ひとつ前と変わらぬ世界だつた。

## 第二話『再会した彼は、記憶と同じで同じでない』

割り切ることにした。

なにを、と聞かれれば答えに窮するが。そんな状態が、ユキトの今の不安定な心境を物語っている。

すでに一度、『勇者』として知らない世界に放り込まれた経験があるため、当時よりは柔軟な対応が出来ている。わけもわからず、ただ困惑して何も出来なかつたあの時よりは成長している。そういうユキト自身は断言出来た。

だが、今回はその経験が逆に今のユキトを困惑へと蝕んでいる。

同じ世界。

しかし時は遡り。

再会が不可能な友に再会する。

見覚えがない土地（結果的には知る土地だったが、ユキトはあまり覚えていない土地だった）に飛ばされたといつこのには、余裕があるなど自分で感心するほど冷静に対処が出来た。

一夜あけて。

不安も多少は解消され、とりあえずあてもなく水浴びをしている時に、それが起きた。

ユキトは切実に問いたい。

死んだはずの人間が生きているって、そんな話があるか？  
夢じやない。幽霊でもない。たしかに、生きている。

ユキトの記憶の中と変わらぬ姿で。けれど決定的に違う部分を携えて。

それは、ユキトのことを知らないこと。

困惑を示すメーターは知らず知らずのうちに振り切らた。だからだろうか。通り越した困惑は、ユキトに一時的にではあるが余裕を与えた。

余裕が出来たおかげで考へが巡り、同じ世界でも時間を遡つてい

るのではないかと仮定できた。そして、それらを割り切ることも。

それが出来たおかげで、アラムにもなんとか対応ができた。そして、そのままアラムに誘われる通りにコキトは森の中を歩いている。

狩りをするためだ。

腹に何もいれないまま過ぎ」していたコキトは、アラムと話しているうちに不本意なことに盛大に腹が鳴ってしまった。それを聞いたアラムは、これ幸いとでも言つように狩りに連れ出したのだ。

空腹を訴えている上に、狩りの経験があるのかも聞かずに強引に連れ出す姿に、同じだな、という感想を持つてしまつ。不意に過去の記憶が蘇り、足が止まる。

不意に止まつたからか、アラムが声をかけてきた。

「（こ）いら辺にたぶんいるぜ。ん？ どうかしたか、コキト？」

「……いや、なんでもない。ちょっと考えごとしてただけだ。気にしないでくれ」

「あいよ。じゃ、気を張つていけよ。集中不足で獲物を逃がすなんてまつぱら」めんだ

「そうだな。俺も早く空腹をなんとかしたい」

氣を引き締めて歩き出す。ただ、頭の中では（こ）のことを思い出してしまつ。

アラムと狩りをすることは、旅の中で何度もあった。要領がイマイチ分からぬまま旅に出たので、食料が次の街まで持たないことがあつたのだ。

そんな時はアリストイに木を集めて火を起こしてもらい、その間に近くにあつた適当な草原や森、川でアラムと共に狩りをした。頻度がそれはもう多かつたため、次第に狩りのスキルは自然と身についていった。

ただ、ユキトもアラムも罷は作れないし、「もそんなに得意ではない。アラムは村の近くの森（つまり、いまコキトがいる森）で狩りの経験があつたとはいえ、慣れない地では思つように事が進まなかつたりもした。

その点、今回はアラムは地形や獲物を特徴を知っているため、かなり堂にいった狩りの行動をしている。今も狙い目の獲物がいるらしいヒリアに入つてからは、足音を殺し、周囲にかなり注意を向けている。

発見は予想以上に早かった。

「見つけたぜ」

アラムが指差す方向を見れば、暗い赤茶色の毛をすんぐりした身体に纏い、四足方向で移動するイノシシのような生き物がいた。

「あれは？」

「コトイノイってやつだ。肉は脂もほどよく乗つてて血こじし、大きな牙と比較的丈夫な毛皮は加工品としても重宝する。狩りの獲物としては、かなりアタリだぜ」

狙つて探したんだけどな、と言つてアラムは笑うが、よつはそのコトイノイという生き物が、森のどの辺りに住んでいるのか、どんな時にどこに現れるのか、そういう生態を知つていいということだ。そういう所に詳しいのは、やはりアラムか、とユキトは変なところに感心する。

「さすが、狩りと資源集めだけで生計を立てれる体力バカなだけはあるな」

小声で呟く。こんなこと聞かれたら、アラムに叩かれそうだ。弓や罠を使わない時点で効率的ではないし、体力バカも事実だしいいか、とひとり納得する。

「それで、どうやって仕留めるんだ？」

「もちろん、ユキトにも手伝つてもらうぜ。……あ

「どうしたよ、いま重要なことを思い出した、みたいな顔をしてよ」

「ユキト、お前、狩りの経験つてあるか？」

「…………よつやくこま聞くのか。やつぱり、そういうところが抜けてるよな」

「う、うるせーな。うつかり忘れてただけだぜ！？…………あれ、やっぱりつてなにがだ？」

「あー、いや、なんでもない」 目の前にいるのが『アラム』だから、いつの間にか碎けた口調を使ってしまい、内心焦るユキト。目の前の人物は、『アラム』ではあるけど、まだ初対面だといふことを忘れないようにもう一度心に留める。

同じ世界でも、どんなことが起きるのか分からぬ以上、ユキトがすでにアラムのことを知っているのは、隠すべきだ。下手なことをして、不測の事態に巻き込まれるのは必ず面倒になる。

疑問を逸らすため、強引にでも話題を戻す。

「それで、狩りの経験はあるよ」

「そりやよかつたぜ。やっぱ人は見かけによらないな」

「どういう意味だよ、それ」

「会った時から思つたんだけど、ユキトってどうも優男みたいな雰囲気がな。生き物は殺せない！ ってなこと良いそうな顔をしてやがるぜ」

「……よく言われたよ。でも、生きるために。昔はそんな時期もあつたけど、いまは躊躇わない」

『勇者』となつて間もない頃。まだ慣れない剣を扱おうと、必死になつていたころだ。

初めての狩りの時、『アラム』に同じことを言われた。その時は虚勢を張つて、そんなことはないと言つたが、実際に目の前にいる獲物に剣を突き立てようとした時、どうしても出来なかつた。その油断のせいでの反撃をうけ、胸に怪我をした。その傷は、いまでも残つてゐる。

生きるために躊躇をしてはいけない。それを忘れないために、回復魔法もあまりかけてもらわず、残したものだ。

「それでこそ男つてやつだぜ。やっぱ、男の生きがいは生きるか死ぬかを競い合つとこだな！ くーつ、わかるじやねえか、ユキト！」

「ああ、そうだな。まずはあいつを狩つて食つか！」

急にテンションの上がつたアラムに苦笑しつつも、懐かしいそのノリにユキトも思わず合わせてお互に手を立てて強く握り合つ。

「やるゼー。」

「おひー。」

お互いにやる気を高め合って、まあ狩りをしようと獲物の方をみれば

……

「あ、あれ？」

「…………いなー」

赤茶の体表をしたイノシシもどきは、二つの間にか消え去っていった。

ユキトとアラムが、逃がしたのは互いのせいにしだして、さらに周りから動物たちが逃げていったのは一人には預かり知らないことである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4806z/>

---

異世界召喚（二週目）・ハードモード（仮）

2011年12月26日22時54分発行